

病院型認定栄養ケア・ステーションとして 入院から在宅まで継続した栄養管理の実践

南大和認定栄養ケア・ステーション

南大和病院栄養部 科長

依田理恵子氏

一般病床、地域包括ケア病床、回復期リハビリテーション病棟の計40床を持つ南大和病院。入院中から退院後まで患者の療養生活を管理栄養士がサポートしています。医師との連携や退院前から調整、事務処理の効率化など同認定栄養ケア・ステーションの現状と強みを栄養部科長の依田理恵子さんにうかがいました。

訪問栄養食事指導につなぐため 入院時から調整し効率化を図る

南大和病院は2018年に認定栄養ケア・ステーション（以下CS）を立ち上げる以前より、退院後在宅で栄養管理が必要な患者に対して積極的に訪問栄養食事指導を行ってきました。そのため、院内にCSを設置するのに大きな反対や反発はなく、同法人に所属する栄養部のスタッフが、それまでと同様に業務を分担する形で今日までCSを運営しています。

当院では病院型のCSとして大きく2つの事業に取り組んでいます。一つが、「訪問栄養食事指導」です。管理栄養士たちはほとんど病棟に出て、患者さんの退院の情報やいち早くキャッチできるように動いており、自宅に戻った後も栄養ケアが必要な患者の場合は、主治医に私たちのほうから「訪問栄養指導に行かせてください」と事前声掛けをしています。退院後からの調整だと、開始までの事務

手続きのやり取りの手間が増えてしまうので、入院中に医師や本人、家族の確認を取りながら調整を進め、退院後すぐにスタートできるようにしています。

本来の病棟での栄養管理業務もあるため、CSのための時間を捻出するには業務の効率化や省力化が必須です。また、近年増えているのが、自宅へ戻る前にリハビリテーション目的で、一旦、老人保健施設に入る場合です。その際は、施設の管理栄養士に栄養情報提供書を渡し、施設から自宅に戻る際の栄養ケアや訪問栄養食事指導につながるようにしています。

もう一つの事業が、病院外部の活動です。地域住民の健康管理のために市民講座や料理教室などの研修会で講師として声をかけてもらう機会が増えており、栄養部として地域住民の方々とのつながりを深められています。

栄養改善による成功体験を 医師や多職種と共有

CSを含め、栄養士や管理栄養士が活躍する場所や、必要とされる場面が増えてきていると感じています。病院や介護施設、在宅などで栄養士や管理栄養士がかかわることで状態や状況が良くなる人が増え、それが引いては医療費の削減にも影響していくことに、かわっている人たちが気づいてくれるようになりました。まだまだ訪問栄養食事指導などを知らない医師もいるので、知ってもらう機会を積極的につくり、活用してもらうなかで栄養ケアによって患者が改善し医師や看護師、リハビリテーション職の業務負担などが軽減する成功体験をつくっていきたいと考えています。そして、信頼してもらえらる・期待に応えられる栄養士・管理栄養士の育成にも力を入れていきます。



医療法人新都市医療研究会「君津」会
南大和病院
住所：神奈川県大和市下和田1331-2

概要